

書評

「地球外生命論争 1750-1900

カントからロウエルまでの世界の複数性をめぐる思想大全」

マイケル・J・クロウ 著 鼓澄治, 山本啓二, 吉田修 訳 工作社

全 1,004 ページ 定価 20,000 円 ISBN4-87502-374-2

井田 茂¹

本書は、18世紀から20世紀はじめまでの、西洋の哲学者、科学者、宗教者といった思想家たちの、地球外知的生命の存在に関する論争を克明に綴ったものである。野尻抱介氏は「SETIは知的生命のたしなみである」と述べているが [1]、本書を読めば、野尻氏の言葉が実感できるであろう。

記述は物語風ではなく、資料にもとずいて客観的事実を積み上げていくという、完全な学術書スタイルであり、それが3巻1,000ページにわたって続くので、通読するのはかなり辛い。しかし、系外惑星研究やアストロ・バイオロジーが注目を浴び始めているいま、「地球外生命の存在 = 世界の複数性」についての先人たちの議論をざっとでもいいから眺めておくことは、惑星科学に携わるものにとっては無駄ではないだろう。価格的には個人で購入するには高価だが、研究費で購入し研究室に備えておくには適しているであろう。

系外惑星研究に携わっている評者にとって、欧米研究者の議論の中で、しばしば出てくる「神に選ばれた惑星 = 地球、神に選ばれた生命 = 人類」という感覚と、SETIやアストロ・バイオロジーへの強い興味（スター・トレックなどの一般の人気も同系列のものだろう）といった「生命は宇宙に充滿している」という感覚が、どうして共存しているのか不思議で仕方がなかった。本書を読むと、西洋の思想家たちは、キリスト教のもとに、この唯一絶対世界論と複数世界論の矛盾した考えの相克にずっと悩み続けて来たことがわかる。つまり、キリストは唯一絶対で、そのキリストが生まれた地球は特別なのだという考えがある一方で、神は全能なのだから地球だけでなく、

他の星にも生命を授けるに違いないという考えもあるわけである。一人の思想家でも、時期によって絶対的の唯一世界論と多世界論の両極端の間を大きくぶれることがある。多くの日本人にはあまり実感できないが、この矛盾は西洋の人々にとっては大きな問題であり、西洋の科学者にとってもそれは同じであるようだ。

本書には、ラプラス、ボーデ、ハーシェル、スキアパレリ、ロウレルといった、惑星科学や天文学ではおなじみの人々が次々と登場する。惑星科学は非常に強く文化と結びついた学問であることが実感される。

参考文献

- [1] 野尻抱介, 2003, 遊星人 12, 28.

¹ 東京工業大学理学部地球惑星科学科